

国の状況を見聞すべく渡米を計画した。

しかし、資金が無く、それを調達すべく、旧鳥取藩主池田輝知公に渡米の主旨を述べ援助を願った。輝知公は、その意を了とし、また、陪席した侍臣河崎眞胤、神戸信義、高田小二郎らから資金を送られ「成功を期せよ」との激励を受け、明治18年（1885）勇躍カルホルニア州サンフランシスコに向って出発した。

時あたかも大政官制廃止により、伊藤博文が総理大臣となり内閣を組織した年である。

はじめ、桑港の中学に入り、加州教育総監アンダーソン博士の知遇を得て文学を講究した。その間、次第に米国の事情がわかるにつれて、米国では一定の技術をもって世に立つことが必要であることを悟り、加州州立大学歯学部に入學、教頭のL.L. ダンバー博士について歯科医学を修め、さらに、同学部特別科を修めた。業成るや桑港において開業した。その傍ら、在留邦人の一団である愛国同盟に加わり、また、日刊桑港新聞（邦字新聞）の主筆として活躍した。これは邦人の一致団結を図るのが目的であった。

当時、桑港教育委員会が公立学校に日本人の入學を拒絶するという決議を行なったのに対し、彼は専心運動し、この決議を撤回させるのに盡力した。

明治27年（1894）オレゴン州立医科大学チャンス教授の助手として招聘され、ポートランド市に移り、歯科医学教育に従事する傍ら同州立法科大学に学び法律学を修め、さらに、ポートランド新報なる新聞を発行した。

この時、日清戦争が起こるや、報国同盟を組織し、自ら会長となり、自己の新聞を利用して軍資金の募集に着手し、当時の金で数万円を日本に送った。勝利の報を聞くや祝勝会を同市に開き、外人に対し日本人の面目を発揚した。その功績として、イギリス皇帝即位のため米国を通過した有栖川親王殿下より銀盃が贈られた。

明治29年（1896）米国駐在全権公使星亨と会い、在米中の政治力をかわれ「今日の日本の政治家の多くは、政治に衣食するもの多く、独立の職業をもつ君の如き人物が政界に立つことは、政界

の刷新ができるので速やかに帰朝して政界に盡してほしい」と要請されたので感ずるところがあり帰国することになった。

帰朝後は、高山歯科医学院隣接の高山紀斎邸（芝区伊皿子町75：港区高輪2丁目1番）に居を構え、診療所を京橋区山城町に開設した。その傍ら、前述の如く高山にこわれ同歯科医学院でも教鞭をとった。

明治32年5月25日、東京帝国大学で開かれた「国家医学会」において「歯科法医学」について「裁判医術」において歯牙を鑑別するには」と題し発表を行なった。

これ以前、明治27年2月2日（1894）に小島原泰民の「裁判歯科学」、また、明治28年10月の「歯科医学叢談」第1号に、血脇の義兄広瀬武郎の「歯科法医学」が発刊、発表されているが、学会での歯科法医学の発表は山村をもって歯科界での嚆矢とする。

32）（続）赤尾酔仙氏について

(Continued) Dr. Suisen Akao

（株）モリタ製作所取締役相談役 長谷川俊夫

Toshio Hasegawa, J. Morita Corporation

現在盛業中の日本歯科新聞のことではなく、大正から昭和の終戦までの社主 赤尾酔仙氏について述べる。

赤尾酔仙は、せまり来る敗戦と中傷の間に嫌気をさして、自らペンを置いて、故郷の四国今治に帰ってしまった。以後は、長年に亘って収集した絵画、或いは、自ら友人の付き合いの棟方志功に指導を受けた絵画に筆を親しんだ。

思えば今の老人年齢と比べば若すぎた。20才代の若さで歯科界に躍り出て、30才代ではすでに中央の歯科界に活躍し、常に野党的精神に溢れて、官歯科界に挑戦した師の面影と足跡を探る。尚、晩年の余生を話したいと思う。